Ibn Tūmart 時代のアルモハード・ヒエラルヒー

私 市 正 年

The Almohad Hierarchy in the Reign of Ibn Tūmart

Masatoshi KISAICHI

The purpose of this paper is to try to examine what is called 'the Almohad hierarchy' in the reign of Ibn Tūmart from a point of view of the governmental structure. In his reign, almost all of the Almohads were organized in the Almohad hierarchy which had the characters and the functions as follows:

- ① Ibn Tūmart was on the top of the Almohads as an absolute chief.
- ② *al-'Ashara* (The Ten), that is, Ibn Tūmart's ten confidants, being the first to recognize him as Mahdī. They formed the council which discussed all matters of great moment were under the Mahdī.
- ③ *al-Khamsūn* (The Fifty), that is, fifty representatives of the Almohad tribes, forming the grand assembly of the Almohad community which discussed matters of less importance. They were intermediaries between Ibn Tūmart and the tribes.
- ④ The *Ṭalaba* and the *Ḥuffāẓ*, being missionaries. The *Ḥuffāẓ* were the boys studying the Qur'ān and the Almohad doctrine and becoming the *Ṭalaba*.
- ⑤ The *Ahl al-Dār*, being the chamberlains who served Ibn Tūmart days and nights.
- ⑥ The Almohad tribes equal to the list of al-Qaṭṭān: Hargha, Ahl Tīnmallal, Jadmiwa, Janfisa, Hintāta, Ahl al-Qabā'il. Most of the Almohad soldiers were composed of them.
- ⑦ The *Jund*, that is, regular soldiers, being constituted of the foreigners who came from the towns with Ibn Tūmart, but their scale

was small.

⑧ The *Ghuzāt*, apparently being the special military groups of boys.

はじめに

12—13世紀にかけて、マグレブ、イフリキヤ、アンダルシアの一帯を支配下に治めたムワッヒド朝 (1130—1269) は Ibn Tūmart (1091頃—1130) の宗教的・政治的運動を土台としている。それはタウヒード (神が唯一であること) の教義を説くことから、ムワッヒド (タウヒードの教義の信者) 運動と呼ばれる。彼は1121年から1130年までの9年間 (彼の生地 Ījilliz で3年, Tinmallal で6年), 宣教とムラービト朝打倒をめざして運動を展開するが, その間に彼の下に結集した人々や諸部族 (ムワッヒド集団) の組織化を行なった。それがアルモハード・ヒエラルヒーと呼ばれる組織⁽¹⁾である。こうしてムワッヒド集団に属する者は, 何らかの形で組織化された。

ところで, この組織についてはその重要性が強調される反面, 曖昧な点が多い。Roger Le Tourneau はその理由として, 史料の不明瞭さと史料相互の矛盾した証言の二つをあげているが, 従来の研究方法の中にもこの問題を曖昧にしている原因がある。この組織は, Ibn Tūmart によって創始され, その後ある組織は解体・消滅し, また改良され, さらにいくつかの組織が付け加えられ, 全体として大きく変っていったが, 王朝末期まで存続した。それ故, この組織全体の正しい性格や役割の分析, 位置づけは Ibn Tūmart の時代から王朝の崩壊までの時代を通して分析することによって初めて可能となるものである。それにもかかわらず, 従来の研究では, 個々の組織を時期, 時代に分けることに十分な注意を払わなかったり (J. F. P. Hopkins⁽³⁾, R. Le Tourneau⁽⁴⁾, (ch. A. Julien)⁽⁵⁾), またそのことを考慮したとしても ‘Abd al-Mu’min (Ibn Tūmart の初代の後継者)⁽⁶⁾以後の変化の過程の分析を怠ったりしてきた (Huici Miranda⁽⁷⁾, Rachid Bourouiba⁽⁸⁾, Henri Terrasse)。さらに従来の何れの研究からも, この組織と国家構造との関係の分析が欠落している。

従って筆者は, こうした研究方法の欠陥を補い, 従来のアルモハード・ヒエラルヒーの全体像を多少なりとも明瞭にするため次のような方法と目的を持って考察するが, 紙数の関係から本稿では次に述べる二つの問題のうち①のみに限定し②については稿を改めて論ずることとする。

- ① Ibn Tūmart の時代をアルモハー・ド・ヒエラルヒーの「原型」として、その中の個々の組織の役割や性格を分析し、併せて国家構造との関係を考察する。
- ② ‘Abd al-Mu’min の時代以後を、その「展開過程」として、その過程における個々の組織の存在の有無、役割や性格の変化、新たな組織の創設などを分析し、併せて国家構造との関係を考察する。

なお本稿で用いる主な史料とその略称は次の通りである。

Documents inédits ; *Documents inédits d'histoire almohade, fragments inédits du "Legajo" 1919 du fonds arabe de l'Escurial*, Lévi-Provençal (ed.) Paris, 1928 これは、1924年スペインのエスコリアル図書館で発見されたマニエスクリプトを整理したもので三つの部分からなる。第一が Ibn Tūmart と ‘Abd al-Mu’min の書簡集 (*Kitab al-Majmū’*)、第二が *Kitab al-Ansab* と呼ばれる著者不詳の書の抜萃（以後 K. al-Ansāb と略す）、第三が Ibn Tūmart と ‘Abd al-Mu’min に仕えた al-Baydhaq の年代記 (*Ta’rīkh al-Muwahhidīn*, al-Baydhaq と略称) である。

al-Qaṭṭān; Ibn al-Qaṭṭān, *Juz’ min Kitāb Nazm al-Juman*, Tétouan, 刊行年不詳。

Ibn Ṣāḥib; Ibn Ṣāḥib al-Ṣalā, *al Mann bi’l-Imama*, Beirūt, 1964

al-Mu’jib; ‘Abd al-Wāḥid al-Marrākushī, *al-Mu’jib fī Talkhīṣ Akhbar al-Maghrib*. Cairo, 1949.

al-Ḥulal; 著者不詳, *al-Ḥulal al-Mawshiyya fī Dhikr al-Akhaar al-Marrakushiyya*. Rabat, 1936

al-Qirṭās; Ibn Abī Zar’, *al-Anīs al-Muṭrib Rawḍ al-Qirṭās*, Upsaliae, 1843—46.

al-Bayān; Ibn ‘Idkāri al-Marrākushī, *al-Bayān al-Mughrib fī Akhbar al-Andalus wa’l-Maghrib*. Vol. 3 Tetouan, 1963.

al-Zarkashī; *Ta’rīkh al-Dawlatayn al-Muwahhidīyya wa’l-Ḥafṣīyya*. Tunis, 1966.

al-‘Umari; *Masālik al-Aḥṣar fī Mamālik al-Amsar*. Cairo, 1924. 本稿では抄訳 *L’Afrique moins l’Égypte*, (tr.) M. Gaudefroy-Demombynes,

Paris, 1927 を使用。

Ibn Khaldūn; Ibn Khaldūn, *Kitāb al-ʿIbar*. I-VII. Beirut, 1966—61.

al-Athīr; Ibn al-Athīr, *Kāmil fī al-Taʾrīkh*. Vols., X, XI. Beirut, 1966.

I Ibn Tūmart 時代のアルモハード・ヒエラルヒー

所謂アルモハード・ヒエラルヒーの諸組織を列挙している史料は al-Qaṭṭān⁽⁹⁾,
K. al-Ansāb⁽¹⁰⁾, al-Ḥulal⁽¹¹⁾ の三つである [表(1)]。al-Ḥulal は al-Qaṭṭān を写

表(1) 史料にみられるアルモハード・ヒエラルヒーの一覧

史料	al-Qaṭṭān	K. al-Ansāb	al-Ḥulal
	al-ʿAshara (Ahl al-Jamāʿa)	Ahl al-Dār	al-ʿAshara
	Ahl al-Khamsin	Ahl al-Jamāʿa	Ahl al-Khamsin
	Ahl al-Sabʿin※④	Ahl al-Khamsin	Ahl al-Sabʿin※④
	al-Ṭalaba	Hargha	al-Ṭalaba
	al-Ḥuffāz	Ahl Tinmallal	al-Ḥuffāz
	Ahl al-Dār	Jadmiwa	Ahl al-Dār
	Hargha	Janfisa	Hargha
※⑤ {	Ahl Tinmallal	al-Qabāʿil	※⑤ { Ahl Tinmallal
	Jadmiwa	Kūmiya	Jadmiwa
	Janfisa	南の Haskūra	Janfisa
	Hintāta	日陰の Haskūra	Hintāta
	Ahl al-Qabāʿil	南の Ṣanhāja	al-Jund
	al-Jund	日陰の Ṣanhāja	al-Ghuzāt と
	al-Ghirrāt ※⑥ (al-Ghuzāt)	ʿAbid al-Makhzān	al-Rumāt
		Muḥtasibūn	
		al-Ghuzāt	
		Sakkākūn	
		al-Jund	
		Muʾadhdhinūn	
		(al-Ṭalaba)※⑦	
		al-Ḥuffāz	
		Ahl al-Ḥizb	
		al-Rumāt	

※④ Ahl al-Sabʿin については、具体的史料が殆どなく、また著者 (Ibn al-Qaṭṭān) もその存在を疑がっているので、考察からはずす。⑥ al-Ghuzāt の分析で述べるように、校訂者 A. M. Makki がこれを al-Ghirrāt と読むのは誤りである。⑦ 独立した組織として扱われていない。⑤ { の部分はアルモハード部族である。

したもので、Ahl al-Qabā'il が落ちていること、最後に al-Ghuzāt と並べて al-Rumāt を付加していること以外は al-Qaṭṭān と同じである。しかし K. al-Ansāb には他の二つにないいくつかの組織が含まれている。後述するように、これは K. al-Ansāb に 'Abd al-Mu'min 以後の時代に加えられた組織が混在しているためである。これに反して、al-Qaṭṭān はその al-'Ashara のメンバー、アルモハー・ド諸部族名などからわかるように、Ibn Tūmart 時代の組織を伝えたものである。従って本稿では原型に最も近いと考えられる al-Qaṭṭān の叙述に従って考察を進める。

II 個々の組織について

1. al-'Ashara

表(2)からわかるように al-'Ashara のメンバーは様々である。特に al-Mu'jib のそれは他の史料と異なっている。史料によるこうした差異について、従来十分な研究がなされてこなかった。⁽¹²⁾史料間のメンバーの差異について表(2)を基に整理すると次のようになる。①al-Qaṭṭān の10人は K. al-Ansāb の m, n を除く10人と一致する。②その10人は史料から確認できない f を除き Ījilliz 到着までに Ibn Tūmart の弟子となっている。③その10人は全て Ibn Tūmart 時代の生存が確認できる(内5人が al-Buḥayra の戦いで死ぬ)。④K. al-Ansāb が11, 12番めにあげる m, n は後に恰も補充されたかのように全く説明がなく(他の10人には何らかの説明がある)、また Ahl al-Dār のメンバーと重複している。⑤al-Qirṭās, al-Ḥulal, al-Zarkashi はそれぞれ不明瞭な人物(k, l, p, q, r, s)を含む。⑥al-Mu'jib は他の史料と異なり、当然あげるべき重要人物(b)やその他の有力者たち(e, f, g, h, j)を除いている。⑦al-Mu'jib のあげる o, a, d, i, v, c は全て七年戦役(1139—46)以後の生存が確認できる。⑧u はその行動からして当然 'Abd al-Mu'min 時代に生存していたと考えられる。⑨x の行動内容は 'Abd al-Mu'min 時代以後のものであろう。⑩al-Mu'jib 以外の史料は Ibn Tūmart 時代に死んでいる者と 'Abd al-Mu'min 時代に生きている者とが混在している。

以上の整理から次のことを確認できよう。

- ① al-Qaṭṭān の10人が最初の al-'Ashara である。

② al-Mu'jib の10人は 'Abd al-Mu'min のカリフ就任以後のメンバーである。

③ その他のメンバーは、①と②の間、あるいは②以後のメンバーの異動か、もしくは史料の誤りと考えられる。

かくして Ibn Tūmart 時代の al-'Ashara の最初のメンバーは al-Qaṭṭān の10人であることが明らかとなった。表(2)及び al-Qirṭās⁽¹³⁾ や al-Athir⁽¹⁴⁾ の叙述からわかるように、彼らは最も早く彼の弟子となり、最も信頼された人々であった。

それでは al-'Ashara の役割・権限はいかなるものであったのか。Ibn Tūmart は独裁的権限をもっていたわけであり、そのこととの関係に於ては al-'Ashara の権限は相対的に大きくはない。しかしながら、他のムワッヒドたちとの関係に於ては、彼らの権限は極めて大きかったと考えられる。⁽¹⁵⁾

史料から析出できる彼らの役割・権限は次の通りである。al-Qaṭṭān は「Ibn Tūmart のワズィールたち：彼らは特に選び出された10人の人々である」と述べ、さらにまた「もし、彼ら（ムワッヒドたち）が重要な問題进行处理する時には、それは専ら al-'Ashara によって処理される。そこには al-'Ashara 以外の者は決して加わらない」と述べる。⁽¹⁷⁾ ムワッヒド朝の末期、チュニスを都として独立したハフス朝（1228—1574）で、アルモハード・ヒエラルヒーが継承されたことはよく知られている。そのハフス朝に関して al-'Umari は「カーディー Abū al-Rāḥ Ṭisā al-Zawāwī の語るところによれば、スルタンが会議を開く時、助言と決議のために3人の者が坐る。もし軍隊の長（ワズィール）が（ムワッヒドの）大シャイフであれば、彼はスルタンとともに坐る。そうでなければ彼は彼らの前に立っている。その下には10人の大シャイフたち——上述の3人もその10人に属する——が坐る。さらに50人の人々がその下に位置を占める」⁽¹⁸⁾と述べている。この10人の大シャイフたちが al-'Ashara を、50人の人々が後述の al-Khamsūn を継承したものと考えられる。10人の大シャイフたちは Ibn Tūmart 時代の al-'Ashara の役割、即ち重要な政務の決定・執行という役割を継承しているのであろう。

Ibn Tūmart が死の少し前に、al-Jamā'a (al-'Ashara) に食糧の分配や遠征などについて指示を与えたとか、⁽¹⁹⁾ al-Jamā'a (al-'Ashara) や al-Khamsūn

を呼び、後継者として ‘Abd al-Mu’min を指名した⁽²⁰⁾、という記述からは、al-‘Ashara が Ibn Tūmart から直接、相談や指示や命令を受ける人々であったことがわかる。

ところで al-Baydhaq が報告する Ibn Tūmart による第4回めの遠征に於て、‘Abd al-Mu’min ((2)の④) が Jadmiwa 族を、Abū Ibrāhīm Ismā‘il b. Yisallālī (©) が Hargha 族を、‘Abd Allāh b. Ya‘lā al-Zanātī (①) が Janfisa 族を、Abū Ḥafṣ ‘Umar b. Yaḥyā al-Hintātī (①) が Hintāta 族⁽²¹⁾を指揮した。また Ibn Tūmart 時代の最大かつ最重要の戦である al-Buḥayra の戦では al-Bashir (⑥)⁽²²⁾ が指揮をとった。このように al-‘Ashara のメンバーは、しばしば軍事的遠征の指揮者となっている。

K. al-Ansāb によると ‘Abd al-Mu’min (④) が Ibn Tūmart により“時の人”(Ṣāhib al-Waqt) と呼ばれ褐色の馬に乗る特権を与えられ、Abū al-Rabī‘ Sulaymān b. Makhlūf al-Ḥaḍramī (al-Ḥaḍrī) (©) がイマーム・マフディー (Ibn Tūmart) の名に於て手紙を書き、Abū Ibrāhīm Ismā‘il b. Isallālī al-Hazrajī (©) がイマーム・マフディーの名に於て人々の間の紛争の裁決をし、Abū ‘Imrān Mūsā b. Tamārā (④) が al-Jamā‘a の長官 (Amin) であり、Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Sulaymān (⑥)⁽²³⁾ が義務としての礼拝の指導者であった。これらのことは、彼らが Ibn Tūmart の下で政務を分担し、ムワッヒドたちを指揮していたことを物語っている。

以上のように、Ibn Tūmart 時代の al-‘Ashara は数少ない具体的史料から判断する限り、Ibn Tūmart から直接、助言を求められ、重要な政務、職務の指示・命令を受け、かつ執行する人々であり、また軍事的指導者でもあった、と言える。

2. Ahl al-Khamsin (al-Khamsūn)

Ahl al-Khamsin とは“50人の人々”という意味である。しかし表(3)からわかるよう、al-Qaṭṭān⁽²⁴⁾によれば41人、K. al-Ansāb⁽²⁵⁾によれば45有余人である。この点について、R. Montagne 及び J. F. P. Hopkins は、この組織がベルベルの伝統的部族長会議 (Ayt Arba‘in ; “40人の人々”の意) を基にして作られたものであること、その Ayt Arba‘in は40人という名称を持っているが、実際の人数は様々であること、を理由に Ahl al-Khamsin を正確に50

表(2) al-'Ashara のメンバー

史料 メンバー	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	没年	Ijilliz 到着までに 弟子とな った者 (※)	その他の主な事柄
a	1	3	1	1	1	1	2	1163 ^③	※ ^⑮	初代カリフ
b	2	1	9	2	10	10		1130 ^④	※ ^⑮	Tinmallal でのバイア ^④ 。 Tamyiz の実施 ^⑤
c	3		4	6	4		8	1153-54 ^⑤	※ ^⑰	Tinmallat でバイア ^⑥ 。
d	4	2	2	4	2	2	3	1144-45 ^⑥	※ ^⑮	Tinmallal でバイア ^⑦ 。
e	5		3	5	3 ^①	4 ^②		1130 ^⑦	※ ^⑮	
f	6		5	8				1130 ^⑧		al-Khamsūn に2人の兄弟が いる ^⑧ 。
g	7	4	6	10	6			1130 ^⑨	※ ^⑳	
h	8		7		7	8		1130 ^⑩	※ ^㉑	
i	9	6	10	3	9	3	4	1175-76 ^⑪	※ ^㉒	
j	10		8		8	9		1132頃 ^⑫	※ ^㉓	al-Buḥayra の戦に参加し生 残る ^㉓ 。
k		5								
l		7						1124-25 ^⑬		
m			11							Ahl al-Dār のメンバー ^㉔ 。 Tinmallal でバイア ^㉔ 。
n			12					1134-35 ^⑭		Ahl al-Dār のメンバー ^㉕ 。
o				7			1			Tinmallal でバイア ^㉖ 。 1146年 Salè の統治者に任命さ れる ^㉖ 。
p				9						
q					5	6				
r						5				
s						7				
t							5			Ibn Tūmart の主な弟子の一人 であった ^㉗ 。
u							6			'Abd al-Mu'min をカリフにす ることに努力 ^㉘ 。
v							7			'Abd al-Mu'min がマラケシュ 不在中の代理統治者 ^㉙ 。
w							9			Tinmallal の人々の間で Ibn Bijit とよばれる ^㉚ 。

x					10			最初はムワッドたちに封 (Iqtā') を分配していた ^㉔
---	--	--	--	--	----	--	--	--

・メンバーの名前は次の通り。

㉔ ‘Abd al-Mu’mīn, ㉕ Abū Muḥammad al-Bashir ㉖ Abū Ibrāhīm Ismā’il al-Hazraji, ㉗ Abū Ḥafṣ ‘Umar b. ‘Alī al-Ṣanhāji (‘Umar Āṣnāj), ㉘ Abū al-Rabī‘ Sulaymān b. (Makhlūf) al-Ḥaḍri, ㉙ Abū ‘Imrān Mūsā b. Tamārā (al-Jadmiwi) ㉚ Abū Yaḥyā Abū Bakr b. Yijit (al-Hintāti), ㉛ Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Sulaymān (al-Tinmalli), ㉜ Abū Ḥafṣ ‘Umar b. Yaḥyā (al-Hintāti), ㉝ ‘Abd Allāh b. Malwiya (al-Zanāti), ㉞ al-Ḥasan b. ‘Alī, ㉟ イフリキアの fakih, ㊱ Abū Mūsā ‘Isā b. Mūsā al-Ṣawdi, ㊲ Abū Muḥammad ‘Abd al-‘Aziz al-Ghayghā’i, ㊳ Abū Muḥammad ‘Abd al-Wāḥid al-Khadri (al-Sharqi), ㊴ Abū ‘Uthmān b. Yakhluḥ, ㊵ Ismā’il b. Mūsā, ㊶ Ibrāhīm b. Ismā’il al-Harghī, ㊷ Abū Yaḥyā b. Makith, ㊸ Yūsuf b. Sulaymān (al-Masakkālī), ㊹ ‘Abd Allāh b. Sulaymān(al-Masakkālī), ㊺ Abū ‘Imrān Mūsā b. ‘Alī al-Ḍarir (al-Tinmalli), ㊻ 「Tinmallal の人々」の出身の者 ㊼ Ayyūb al-Jadmiwi

・史料の名称と参照ページは次の通り

㉔ al-Qaṭṭān pp. 77—80, ㉕ al-Qaṭṭān 中の al-Yasa’ の証言 p. 76, ㉖ K. al-Ansāb. pp. 32—33, ㉗ al-Qirtās p. 113, ㉘ al-Ḥulal p. 88, ㉙ al-Zarkashi p. 6, ㉚ al-Mu‘jib pp. 337—338.

・没年は空欄は、没年不明を示す。

・注

① 史料には Ismā’il b. Makhlūf とある。Makhlūf という名の人物が非常に少ない (Documents Inédits, al-Ḥulal, al-Qirtās の三つの書をもて、Documents Inédits p. 212 に Makhlūf Yalluli なる人物がみえるだけである) ことから考えて、㉔と同一人物とみなしてよさそうである。② 史料には、Ismā’il b. Makhlūf とあるが注①と同じ理由で㉔と同一人物と考えられる。③ たとえば al-Qirtās p. 136 参照。④ K. al-Ansāb, p. 28, ⑤ al-Mu‘jib, p. 233, ⑥ al-Baydhaq, p. 92, ⑦ K. al-Ansāb, p. 33, ⑧ K. al-Ansāb. p. 33, ⑨ K. al-Ansāb, p. 33, ⑩ K. al-Ansāb, p. 33, ⑪ Ibn Khaldūn, Histoire des Berbères (trad. De Slane), 1969, t. II. p. 285, ⑫ al-Baydhaq, p. 85, ⑬ al-Qṭṭān p. 95, ⑭ al-Qaṭṭān, p. 212, ⑮ Ibn Tūmart との出会い al-Baydhaq pp. 55—56参照。⑯ al-Baydhaq p. 59, ⑰ al-Baydhaq p. 70, ⑱ al-Baydhaq p. 64, ⑲ al-Baydhaq p. 70, ⑳ İjilliz でバイアを行なっている (K. al-‘Ibar, VI. p. 469), ㉑ 同じく K. al-‘Ibar, VI, p. 470, ㉒ al-Baydhaq, p. 71, ㉓ İjilliz 期に戦の指揮をとっている (al-Baydhaq p. 75), ㉔ al-Baydhaq p. 73, ㉕ al-Baydhaq p. 78, ㉖ al-Baydhaq p. 73, ㉗ al-Baydhaq p. 73, ㉘ K. al-Ansāb pp. 33—35, ㉙ al-Qaṭṭān pp. 121—122, ㉚ K. al-Ansāb p. 29, ㉛ al-Baydhaq p. 73 ㉜ K. al-Ansāb. p. 29, ㉝ al-Baydhaq p. 73, ㉞ al-Bayān, III, p. 21, ㉟ al-Mu‘jib pp. 193—194,

- ③⑥ al-Mu'jib p. 194, ③⑦ al-Mu'jib p. 338. これは、当然1147年以後のことである。
 ③⑧ al-Mu'jib p. 338, ③⑨ al-Mu'jib p. 338.

人からなる組織と考える必要はないとしている。しかし、この説明ではなぜ“50 人の人々”という名称が用いられたのかが理解できない。これまでの研究者は、人数の問題と名称の問題との関係⁽²⁸⁾を無視してきた。筆者はこの問題について次のように考える。第一に、この組織は、元来は50人から成っていたと考えられる。al-Qaṭṭān は Ibn Ṣāhib (未発見の部分) を引用して Ahl al-Khamsin のメンバーを列挙した後、「彼らの数は以上のリストによれば、41ないし40である。50人のうちの他の人々はどこにいるのか⁽²⁹⁾」と述べているが、このことは al-Qaṭṭān が Ahl al-Khamsin を50人からなると考えていることを示す。Ibn Khaldūn も50人からなると考えている。それでは、具体的に史料によって50人のメンバーを検討してみよう。表③からわかるように⑧⑨⑩⑤⑥は Ibn Tūmart の弟子となっている。⑪も同様と考えられる。それ故、彼らが al-Qaṭṭān から落ちていると考えた方がよさそうである。彼らを含めると、 $41 + 6 = 47$ となる。残りの3人に誰が含まれるかは明らかではないが、元来は50人であったと考えられる。

第二に、数字のもつ特別の意味である。al-Baydhaq は Ibn Tūmart の第9番めの遠征の件で「罪なき人 (Ibn Tūmart) は言った「Kik (マラケシュ南方の丘の名) の上に Kik があり、たとえ Kik が七重になっているとしても、その何れも我々の Yawm al-Khamis (木曜日の意。しかし文脈的には“勝利”の意) を防ぐことはできない⁽³¹⁾」と述べているが、この Yawm al-Khamis の語の解釈について Lévi-Provençal は M. W. Marçais の書を引用して、北アフリカのイスラム教徒の間では語源的に“5” (al-Khams) に関する言葉が“吉報”や“幸運”という“よいこと”の意味で使用される例がある⁽³²⁾、と説明している。また al-Zarkashī は ‘Abd al-Mu’min が al-Mahdiyya を占領した時、その年を Sanat al-Akhmās (Akhmās は Khums ($\frac{1}{5}$ の意) の複数形) と名づけたと述べる⁽³³⁾。H. R. Idris はその理由の一つとして、数字の5のもつ縁起のよさ、をあげている⁽³⁴⁾。それ故、名称を50人とした一つの理由に、この数字のもつ特別の意味があつたのであろう。

以上二つの理由から Ahl al-Khamsin と変えたものと考えられる。

次にこの組織の役割、権限について考えてみよう。al-Qaṭṭān は「Ibn Tūmart に助言をする弟子たち、彼らは Ahl al-Khamsin である」⁽³⁵⁾、「あまり重要でない問題の時には、al-Khamsūn が (Ibn Tūmart のところに) 呼ばれる」⁽³⁶⁾と述べている。また al-Qirṭās は「Ibn Tūmart は自己に対する助言と相談のため、また自己の権威の結束とムスリムたちの監視のため al-Khamsūn を任命した」⁽³⁷⁾と述べている。この三つの説明から、彼らが al-‘Ashara の下に位置し、Ibn Tūmart の助言と相談の相手であったことがわかる。al-‘Ashara の考察の際述べた al-‘Umari のハフス朝下の al-Khamsūn の説明、即ちスルタンが会議を開く時、10 人の大シャイフたち (al-‘Ashara の継承) の下に50人の人々 (al-Khamsūn の継承) が出席している、という説明はまさにこの al-‘Ashara の下に位置した彼らの性格を表わすものである。

この組織がベルベルの上述の Ayt Arba‘in を基にしていることは明白である。R. Montagne は「Ayt Arba‘in はマグレブのあらゆる地域のベルベル集団の中にみられる。…… (略) ……。Ayt Arba‘in はもともとは、それぞれ10人のメンバーをもつ4つのグループ——全部族を代表している——から構成された一団 (従って合計40人) である」⁽³⁸⁾、「(Ayt Arba‘in に於て) 地方の諸問題、即ち道路や灌漑の状況、木の実の収穫の時期、新しい牧草地への出発時期、政治、近隣諸地域との関係、住民間の争いの問題、罰則などが話し合われる」⁽³⁹⁾と述べる。また al-Athīr は「Ayt Khamsūn 即ち Ahl Khamsūn は諸部族の指導者たちの集団である」⁽⁴⁰⁾と述べる。これらの史料から、彼らが基本的には部族の指導者層から選ばれ、Ayt Arba‘in ほどの権限はなくとも、部族の代表者として、部族民と Ibn Tūmart との仲介、即ち Ibn Tūmart の指示、命令を部族民に伝え、部族民の意志、要求を Ibn Tūmart に伝える役割を果たしていたと考えられる。

3. Ṭalaba (Ṭalīb の複数形)

Ibn Tūmart 時代の Ṭalaba の考察に際し、まず次の事が考えられる。① al-Qaṭṭān のヒエラルヒー全体をみた時、宗教的役割を担うものが Ṭalaba と Ḥuffāz (Ḥafīz の複数形) である。② Ibn Tūmart は彼の書をベルベル語で書き、部族民に自己の教えを理解させることに努力した。そのため、彼の弟子た

表(3) Ahl al-Khamsin のメンバー

史料 メンバーの 通し番号	イ	ロ	没 年	Ibn Tūmart 時代の 記述	‘Abd al-Mu’min 以降の 時代の記述
1	○	○		K. al-Ansāb pp. 39, 40	K. al-Ansāb p. 39
2	○				
3	○				
4	○	○		K. al-Ansāb pp. 38, 40	K. al-Ansāb pp. 39, 102
5	○	○	1144-45		al-Baydhaq p. 88
6	○	○			
7		○			al-Baydhaq p. 110
8		○		K. al-Ansāb pp. 28, 40②	al-Baydhaq p. 112
9		○		K. al-Ansāb pp. 39, 40②	K. al-Ansāb p. 39
10		○		K. al-Ansāb pp. 39, 40②	K. al-Ansāb p. 39
11	○	○			al-Qaṭṭān p. 175, al-Mu’jib pp. 337~338
12	○	○			
13	○	○			
14	○	○			
15	○	○			
16	○				
17	○				
18	○				
19	○				
20	○				
21	○	○			
22	○	○		K. al-Ansāb p. 28	
23	○※				
24	○※				

Ibn Tūmart 時代のアルモハード・ヒエラルヒー（私市）

25		○		al-Qaṭṭān p. 81⑥	al-Baydhaq p. 93
26		○			al-Baydhaq pp. 98, 111, 121, 126
27		○	1154-55		al-Baydhaq p. 119
28		○		al-Baydhaq p. 71⑩	
29		○		年代不詳の記述 al-Baydhaq p. 131	
30		○			
31		○			
32		○			
33		○			
34		○			
35		○			
36		○			
37	○	○	1148-49	al-Baydhaq p. 71	al-Baydhaq pp. 94, 108
38	○				
39	○	○			
40		複数			
41	○	○	1130	K. al-Ansāb p. 28	
42	○				
43		○			
44		○			
45		○			
46	○	○			
47	○	○		al-Baydhaq pp. 72	al-Baydhaq pp. 85, 91, 104
48	○				
49	○				
50		○			
51		○			

52	○				
53		○			
54	○	○			
55	○	○		K. al-Ansāb p. 36	
56	○	○			al-Baydhaq p. 112
57		○			
58	○	○			al-Baydhaq pp. 108, 110
59	○	○			
60	○				
61		○			al-Baydhaq p. 86⑩
62	○				
63	○				
64	○				
65	○				
66	○			al-Muʿjib p. 310	
67		○			al-Baydhaq pp. 109, 111
68		○			al-Baydhaq pp. 93, 99
69		○	1171頃		al-Baydhaq pp. 108, 111, 126
70		○	1151-52		al-Baydhaq p. 114
71		○			
72		○			
73		○			
74		○			
75		○			
76		複数			

・メンバーはそれぞれ以下の部族に属す。

①～⑩ Hargha 部族

⑪～⑳ Tinmallal の人々 (Ahl al-Tinmallal)

㉑～㉔ Hintāta 部族

㉕～㉗ Jadmiwa 部族

- ④⑥～⑤① Janfisa 部族 ⑤②～⑤③ al-Qabā'il (諸部族)
 ⑤④～⑤⑦ Haskūra 部族 ⑤⑧～⑥① Ṣanhāja 部族
 ⑥②～⑥⑥ al-Ghurabā' (よそ者たち), なお ⑥⑦～⑦⑥ は Tamyiz の後に加わった人々である。

・史料の名称と参照ページは次の通り

イ al-Qaṭṭān pp. 30～32 ロ K. al-Ansāb pp. 33～35

・※印の人物名は不明

・○印は、その人物が史料に記載されていることを示す。

・具体的人物名は、煩雑になるので、以下の必要な者のみを示す。

- ⑧ Abū Zakariyā Yaḥyā al-Dara'i, ⑨ Abū Zakariyā Yaḥyā al-Hazmiri, ⑩ Abū 'Isā al-Jazūli ⑫ Abū al-Ḥasan Yūjūt b. Wajjāj ⑬ Abū 'Abd al-Salām Yaṣlātan ⑭ Abū al-Ḥasan 'Alib. Nāṣir

・注

- ① Ījilliz から Tinmallal への移動に際し、Ibn Tūmart に同行した。
 ② Ījilliz 期の初め、ムワッヒド軍の一員として戦い、ムラービト軍の捕虜となる。
 ③ Ibn Tūmart がマラケシュから Ījilliz に移動した時期に、彼と出会う。
 ④ ('Abd al-Mu'min のカリフ就任直後に) Ṣanhāja 族の統治者に任命される。

部族名 \ 史料	イ	ロ
Hargha	6	8
Tinmallal の人々	14	19
Hintāta	3	2 プラス・アルファ
Jadmiwa	2	4
Janfisa	4	4
al-Qabā'il (諸部族)	1	1
Haskūra	3	4
Ṣanhāja	3	3
al-Ghurabā' (よそ者たち)	5	
合 計	41	45 プラス・アルファ
Tamyiz 後に加わった者		9 プラス・アルファ

（別表）部族ごとの人数及び合計

ちに彼の書を暗記させ、また弟子たちのうちのある者には彼の教えの指導をさ
 せた。⁽⁴¹⁾ また彼の教えを広めるため、彼の教えをよく理解した人々を諸部族に派遣した。⁽⁴²⁾ この時代の宣教の重要性を考えると、宣教を主たる任務とする専門集

団が形成されたと思われる。③Ṭalala, Ḥuffāz という言葉の意味も、それぞれ“学生たち”，“コーランを暗唱する人たち”であり，②の任務にふさわしい。

それでは具体的史料はどうか。al-Baydhaq は「520(1126—27) 年，Ṭalaba al-Muwahhidin がアルモハード諸部族のところへ送られた。それらの Ṭalaba のうち Abū [Mū] sā b. Tawimaj が Tifnawt の人々のところへ送られ，Abū Muḥammad ‘Aṭiya al-Manjaṣi が Ghujdāma 族のところへ送られ，またその他の祝福されたる Ṭalaba がアルモハード諸部族のところへ送られ⁽⁴³⁾」と述べる。この Ṭalaba は恐らく最も早い時期のものであろう。そしてこの時期の宣教及び道徳，慣習の改革の重要性から考えると，彼らがそれらの任務を負っていたに違いない。彼らは部族の中に留まり，部族民の教化と指導に努めたのであろう。al-Baydhaq に，al-Buḥayra の戦の後，しばらくして Ibn Tūmart が召集をかけた件で「その日，Janfisa 族の Ṭalaba が欠席していた。そこで Janfisa 族の人々は Hargha 部族の閫兵が終るまで，彼らを探したが見つからなかった⁽⁴⁴⁾……」とあるが，この Ṭalaba は部族民の宣教と道徳，慣習の改革のために派遣され，そこに留まっていたのであろう。al-Buḥayra の戦に敗れ，Tinmallal に逃げる時，「‘Abd al-Mu’mīn は Aghmāt の Ṭalaba とともに Haylāna 族の地へと逃げた⁽⁴⁵⁾……」とある Ṭalaba も上述の例と同じものであろう。これらのことから，Ibn Tūmart の時代の Ṭalaba は宣教師的役割をもった人々である，と結論づけて大過なさそうである。

4. Ḥuffāz (Ḥāfiẓ の複数形)

Ibn Tūmart 時代の Ḥuffāz について具体的事例はない。しかしながら，この時代の状況を伝えたものであることが確かめられた al-Qaṭṭān に，Ḥuffāz が独立した一組織としてとりあげられ，Ḥuffāz は年少の Ṭalaba ⁽⁴⁶⁾である，と説明されていることから，Ḥuffāz は Ṭalaba になるために勉強している少年たちであると考えてよかろう。彼らの役割も，Ṭalaba と同様宗教的性格を持っていたことは明白である。

5. Ahl al-Dār

表(4)をみると，Hargha 部族の者 (k, m, p, t) と Ibn Tūmart の兄弟 (q, r, s) は当然早い時期に Ibn Tūmart の仲間に加わっているはずであるにもかかわらず，al-Qaṭṭān ではそれらが除外されていることに気付く。従

来の研究では、Ahl al-Dār は Ibn Tūmart の兄弟及び Hargha 部族の者を中心としているか、もしくはそれらと深い関係がある、と考えられてきた。⁽⁴⁷⁾しかし K. al-Ansāb の史料だけからは、そう考えることができて、al-Qaṭṭān を参照する限りその考えを肯定することはできない。この組織についてもまた史料の性格の違いを指摘できる。即ち、al-Qaṭṭān のメンバーは、創設期のものであり、K. al-Ansāb は創設期と ‘Abd al-Mu’min の時代の混合である。Ibn Tūmart 時代の彼らの役割（後述）から考えて、彼らがそのまま ‘Abd al-Mu’min の宮廷で仕えることは困難である。従って、彼らは Ibn Tūmart の死とともに、事実上、殆どその役割、機能を喪失したと考えられる。メンバー自体、Ibn Tūmart の兄弟やその一族の者を中心とするようになった。それは、彼らを文字通り Ahl al-Dār al-Imām al-Mahdī⁽⁴⁸⁾（イマーム・マフディーの家の人々）として丁重に扱い、Ibn Tūmart に対する敬意を表わしたのである。㉔が al-‘Ashara と重複し、㉑が al-Khamsūn と重複しているのは、彼らがその組織に移ったためであろう。

次に彼らの役割、権限を考察しよう。al-Qaṭṭān に「Ibn Ṣāhib al-Ṣalā は言った「Ibn Tūmart は彼の家で自己に仕える人々を持っていた。彼らは、彼の弟子のうち Ahl al-Dār と呼ばれている。彼らは、夜も昼も、彼に仕える人々であり、それ故彼らは Ahl al-Dār と呼ばれているのである。Ibn Tūmart はひたすら自己のために、彼らを仕えさせた⁽⁴⁹⁾」とある。また同じく al-Qaṭṭān によれば、Ibn Tūmart が死んだ時 Ahl al-Dār と彼の姉妹と彼の主要な弟子たち以外には、彼の死を知る者はいなかった。⁽⁵⁰⁾これらの史料から、彼らを Ibn Tūmart の私的な侍従と考えることができる。al-Mu’jib に「Abū Muḥammad Wasnār（表4の㉔）は Aghmāt の住民で、黒人であり、皮革職人であった。彼は、Abū ‘Abd Allāh b. Tūmart が Aghmāt を通った時、彼に従った。そこで Ibn Tūmart は彼の熱心な信仰と彼の口の堅さの故に、彼を自己に仕えさせた。彼は Ibn Tūmart の祈り前の浄め（Wuḍū’）と彼の（歯の掃除のための）楊枝の準備をした。また Ibn Tūmart に対する面会の許可を人々に与えること、彼の侍従として仕えること、また外出の時、彼の先導をすること、などの仕事をした。彼は Ibn Tūmart が死ぬまでそうした仕事をした。それから、彼は Ibn Tūmart の墓守をした⁽⁵¹⁾」とあるが、これは、

まさに私的な侍従の職務内容である。この組織が他の諸組織と異なり, Ibn Tūmart の私性格を持っていることは, K. al-Ansāb が諸組織を列挙した所とは全く別の所でこの組織をとりあげていることまた al-Qaṭṭān が, al-‘Ashara から al-Ḥuffāz までの諸組織と諸部族の間に, この組織を置いたこと⁽⁵³⁾から推測できる。以上の史料からAhl al-Dār は Ibn Tūmart の身边で仕える私的な侍従である, と結論できよう。それ故, 彼らは Ibn Tūmart の死という重大な出来事を知りうる立場にあったのである。

表(4) Ahl al-Dār のメンバー

通し 番号	史料 Ahl al-Dār のメンバー	イロ		没年	行動・その他
a	‘Abd al-Wāḥid b. ‘Umar (al-Sharqī)	1	1		<ul style="list-style-type: none"> ・ Ibn Tūmart と Mellāla で出合う^⑤ ・ Ibn Tūmart のエスコート^⑥ ・ Tinmallal 移住後第4番めにバイアを行なう^⑦ ・ al-‘Ashara のメンバー^⑧
b	Abū Muḥammad Wasnār b. Muḥammad	2	2	カリフ Abu Ya‘qūb の治世(1184-99)の初め ^①	<ul style="list-style-type: none"> ・ Ahl al-Dār のうちでひたすら Ibn Tūmart に仕える者^⑨ ・ Tinmallal 移住後, 第8番めにバイアを行なう^⑩ ・ 第7回めの遠征で Ibn Tūmart を助ける^⑪ ・ Ibn Tūmart の死の直前, 家の中に入った5人のうちの1人。彼の遺言を人々に伝える^⑫
c	Abū Muḥammad ‘Abd al-‘Aziz (al-Ghayghā’i)	3	5	1134-35 ^②	<ul style="list-style-type: none"> ・ Ibn Tūmart にひたすら仕える者^⑬ ・ al-‘Ashara のメンバーでもある^⑭
d	Abū Mūsā ‘Isā (b. Mūsā al-Khulāsi) (al-Ṣawdī)	4	12		<ul style="list-style-type: none"> ・ Ibn Tūmart にひたすら仕える者^⑮ ・ Tinmallal 移住後第6番めにバイアを行なう^⑯ ・ al-‘Ashara のメンバーでもある^⑰
e	‘Abd al-Karīm	5	10		
f	Ya‘qūb Afghū (al-Ṣawdī)	6	3		
g	Abū Zayd Tawalwā		4		
h	Abū Ishāq Ibrāhim b. Jami‘		6		

i	Abū ‘Alī Yūnus b. Tādrārt	7		・ al-Buḥayra の戦に従軍 ^⑨ ・ Tīmallal の人々の al-Khamsūn のメンバー ^⑩
j	Abū Zakariyā Yaḥyā b. Umm Ūh-Sūm al-Tinmalli	8		
k	Abū Zakariyā Muḥammad al-Harghī	9		
l	Abū Warziz al-Zanāti	11		
m	Abū Muḥammad Wajjutan al-Harghī	13		
n	Abū ‘Uthmān Sa‘id al-Ḥayḥā’i	14		
o	Abū al-Rabī‘ Sulaymān b. Maymūn	15		
p	Abū Muḥammad Yaṣlāsan b. al-Mu‘izz al-Harghī	16	1151-52 ^③	
q	Abū Mūsā ‘Isā b. Wamghar al-Harghī	17	1154-55 ^④ 同 上	・ Ibn Tūmart の兄弟 ^⑪
r	Abū Muḥammad ‘Abd al-‘Aziz b. Wamghar al-Harghī	18		・ 同 上
s	Abū al-‘Abbās Aḥmad b. Wamghar al-Harghī	19		・ 同 上 ・ 盲目の人 (al-Kafif) ^⑫
t	Abū al-Ḥasan ‘Alī b. Mūsā al-Harghī	20		

・ 史料の名称と参照ページは次の通り。

① al-Qaṭṭān p. 33 ④ K. al-Ansāb p. 29

・ 史料中の番号は、史料における叙述の順番を示す。

・ 注

① al-Mu‘jib p. 339 ② al-Qaṭṭān p. 212 ③ al-Baydhaq p. 116 ④ al-Baydhaq p. 118 ⑤ al-Baydhaq p. 53 al-Mu‘jib p. 181 ⑥ al-Baydhaq p. 80 ⑦ al-Baydhaq p. 73 ⑧ al-Qirṭās p. 113 al-Mu‘jib p. 337 ⑨ K. al-Ansāb p. 29 ⑩ al-Baydhaq p. 73 ⑪ al-Baydhaq p. 76 ⑫ al-Baydhaq p. 81 ⑬ K. al-Ansāb p. 29 ⑭ K. al-Ansāb p. 33 ⑮ K. al-Ansāb p. 29 ⑯ al-Baydhaq p. 73 ⑰ K. al-Ansāb p. 33 ⑱ K. al-Ansāb p. 28 ⑲ K. al-Ansāb p. 34 ⑳ K. al-Ansāb p. 29 ㉑ K. al-Ansāb p. 29

6. アルモハーード諸部族

Ibn Tūmart 時代には、Hargha, Tinmallal の人々, Jadmiwa, Janfisa, Hintāta の5つの部族ないし集団以外に、山岳 Hazmīra 族, Haylāna 族, Māghūs 族, Hunāya 族などが、ムワッヒド集団に加わっていた。⁽⁵⁴⁾ al-Qaṭṭān の al-Qabā'il (諸部族) とは、上述の5つの部族ないし集団以外の諸族を一括して呼んだ名であろう。一方、'Abd al-Mu'min の時代に服従した Hazraja 族, Haskūra 族, Ṣanhāja 族, Kūmiya 族などを含めている K. al-Ansāb は 'Abd al-Mu'min 以後のものと考えられる。また、K. al-Ansāb は al-Qabā'il として Harrāka 族, Warika 族, Īn Māghūs 族, Hunāya 族, Naffis の人々, Ṣāda 族, Rajrāja 族, Hazraja 族の各部族⁽⁵⁵⁾ を、また al-Mu'jib は al-Qabā'il として, Hazmīra 族, Haylāna 族, Hazraja 族, の各部族⁽⁵⁶⁾ をあげているが、これらの al-Qabā'il は 'Abd al-Mu'min 以後のものであろう。というのも、Hazmīra 族, Hazraja 族, Warika 族, Ṣāda (Ṣawda) 族, Rajrāja 族などは、いわゆる平原 Maṣmūda 族⁽⁵⁷⁾ に属し、それらの多くは 'Abd al-Mu'min の時代に服従しているからである。従って al-Qaṭṭān の各部族が Ibn Tūmart 時代のアルモハーード諸部族である、と断定できる。

この時代に於ては、領域はアトラス山岳地帯の Maṣmūda 部族の土地であり、Ibn Tūmart に服従した殆ど全ての部族が、アルモハーード諸部族を構成していたと考えてよい。またムワッヒド軍の大部分はアルモハーード諸部族であった。

7. al-Jund

al-Qaṭṭān は諸部族の後に Jund をあげているが、具体的叙述は見あたらない。K. al-Ansāb の「Jund は Aghmāt の人々や彼ら以外の都市民たちである」⁽⁵⁸⁾なる叙述をもとに、Hopkins は、Jund をアルモハーード諸部族に属さない都市出身者（よそ者）によって組織された軍隊と考える。⁽⁵⁹⁾ たしかに、この時代に都市民たちが、ムワッヒドとなった時、既成の部族組織に加わりにくいことは十分考えられる。Ibn Tūmart は、彼らを直属の常備軍として組織したのであろう。しかし、マグレブの全域を支配するようになった時代の Jund が Aghmāt やその他の都市民たちから成立していたとは考えにくい。Aghmāt

を都市の代表としてあげているのは、まさに Ibn Tūmart 時代の反映であろう。というのも、アトラス山麓に位置する非常に豊かな都市 Aghmāt⁽⁶⁰⁾ は、Ibn Tūmart 時代のムワッヒドたちにとって最も関係の深い都市であり、従ってその住民でもって都市民を代表させても不思議ではないからである。支配地域から考えて、この時代の Jund の規模は大きくはなかったはずである。史料に現われてこないのはそのためであろう。

8. al-Ghuzāt (al-Ghāzī の複数形)

al-Qaṭṭān に Ghuzāt は無教育の若者たちである、という説明がある。⁽⁶¹⁾ しながら、この史料の校訂者 Maḥmūd ‘Alī Makki は、これを Ghuzāt ではなく、Ghirrāt と読むべきである、という。そして Ghuzāt と読んでは、“無教育の若者たち” という説明が理解できないが、Ghirrāt は“未熟な人々”の意であり、その説明に一致すると理由を述べる。⁽⁶²⁾ 筆者は、この解釈は誤りである⁽⁶³⁾ と考える。その理由は、第一に al-Qaṭṭān を写した al-Ḥulal が Ghuzāt と読んでいるからである。第二に、Ghirrāt と読んだとしても、その実態は明らかにならず、⁽⁶⁴⁾ しかもいかなる史料にも Ghirrāt と読む例は見あたらないの⁽⁶⁵⁾ に対して、Ghuzāt は、1129年 al-Buḥayra の戦に敗れたムワッヒド軍が Tinmallal に退却する時「ムワッヒドたちは、アトラス山中で Ibn Tūmart が派遣した Ghuzāt の部隊（‘Askar min al-Ghuzāt）と出会った。そこでムワッヒドたちは、その部隊とともに Tinmallal に戻った」という事例があるからである。⁽⁶⁶⁾ この事例から、Ghuzāt が軍事的性格を持っていたと考えられる。⁽⁶⁵⁾ “無教育の若者” という説明は、彼らが若者の故に未だ十分な知識・教養を身に付けていないことを示しているのではなからうか。

K. al-Ansāb は Ghuzāt が11の部族からなるとして、Hargha から日陰の Ṣanhāja までをあげているが、⁽⁶⁶⁾ これらの部族構成から、これは ‘Abd al-Mu’min の時代以後のものであることは明白である。Ibn Tūmart 時代も、その時代のアルモハー・ド諸部族によって構成されていたと考えられる。何れにせよ、Ghuzāt に関する具体的史料は乏しく、その実態を正確に把握することは困難である。

おわりに

Ibn Tūmart の時代には、ムワッヒド集団の殆ど全てが、アルモハー・ド・ヒエラルヒーに組入れられた。その意味では、この組織が最も生き生きとしていた時代であった。これまでの個々の組織の分析を基に国家構造を整理すると次のようになろう。

- ①Ibn Tūmart は絶対的権力者としてムワッヒド集団の頂点に君臨した。
- ②最も早い時期に彼の弟子となった人々のうち、10人の者が al-‘Ashara を構成する。彼らは、Ibn Tūmart から直接、指示や命令を受け、また必要な助言を求められる。彼らは、最も重要な政務の執行者であり、また軍事的指導者でもあった。
- ③al-Khamsūn は部族を代表する50人からなり、ベルベルの伝統的部族長会議 (Ayt Arba‘in) を基にして作られた組織である。それは al-‘Ashara より権限は小さいが、Ibn Tūmart の指示や命令により政務を担当する。しかし、彼らの役割の特徴は、Ibn Tūmart と部族民との仲介であった。
- ④宗教的、道徳的任務を負う組織が、Ṭalaba と Ḥuffāz である。彼らは、いわば宣教師として諸部族民に、Ibn Tūmart の教えやコーランを説いた。Ḥuffāz は Ṭalaba になるために勉強している少年たちである。
- ⑤ Ibn Tūmart の身の世話をする人々が Ahl al-Dār である。彼らは、夜も昼も、彼に仕える私的な侍従であった。
- ⑥アルモハー・ド部族は、Hargha 族、Tinmallal の人々、Jadmiwa 族、Janfisa 族、Hintāta 族、Ahl al-Qabā’il の6つから構

Ibn Tūmart 時代の国家構造

成されていた。Hargha 族と Tinmallal の人々、が他より優位にあった。Ahl al-Qabā'il とは上の Hargha から Hintāta までの5つの部族に属さない人々からなっていた。ムワッヒド軍の大部分は、アルモハー ド部族民である。⑦ Jund は“よそ者”(都市民)からなる常備軍であった。彼らは属すべき部族がなかったので、Ibn Tūmart に直接仕える兵士たちであった。しかし、その規模は小さかった。⑧ Ghuzāt とは、若者たちからなる特別の軍事的組織である。

以上の関係を図示すると前頁の図のようになろう。

註

- (1) 史料では, Aṣnāf (Ṣinf の複数形)あるいは, Ṭabaqāt (Ṭabaqa の複数形)の語が用いられている。本来は闘兵時の序列を示していたといわれるが、実際にはムワッヒド集団の機能的な分類であり、ヒエラルヒーという語が適当か否か、疑問が残る。
- (2) Roger Le Tourneau, *The Almohad Movement in North Africa in the Twelfth and Thirteenth Centuries*, Princeton, 1969, pp. 30—31.
- (3) J. F. P. Hopkins, “The Almohad Hierarchy,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. XVI, 1954, pp. 93—112.
- (4) Roger Le Tourneau, *op. cit.*, pp. 30—34.
- (5) Ch. A. Julien, *Histoire de l'Afrique du Nord*, t. 2, Paris, 1951 (Péimpr. 1975), pp. 98—100.
- (6) A. Huici Miranda, *Historia Política del Imperio Almohade*, t. 1. Tetouan, 1956, pp. 100—105. 彼は、Ibn Tūmart 時代に存在した組織は、al-Jamā'a (al-'Ashara の異称), al-Khamsūn, Ahl al-Dār のみで、他の組織は 'Abd al-Mu'min の時代に付加されたものという誤った考えを述べている。
- (7) Rachid Bourouiba, *Ibn Tūmart*, Alger., 1974, pp. 77—81.
- (8) H. Terrasse, *Histoire du Maroc des Origines à l'Etablissement du Protectorat Français*, t. 1, Casablanca, 1949, pp. 276—277., pp. 306—309. 彼は Ibn Tūmart 時代と 'Abd al-Mu'min 時代に分けて述べているが⁵, 前者から後者への変化の過程の考察を怠っている。
- (9) al-Qaṭṭān, p. 28.
- (10) K. al-Ansāb, pp. 29—48,
- (11) al-Ḥulal, p. 89,
- (12) Rachid Bourouiba (*op. cit.*, p. 77) 及び J. F. P. Hopkins (*op. cit.*, p. 95) は史料による差異に言及しているが、その説明をしていない。また Huici Miranda はそのことに触れていない。
- (13) al-Qirtās, p. 114.
- (14) al-Athīr, Vol. 10, p. 576.

- (15) 彼らの具体的行動(表(2)参照)からも、そのことは窺えるが、次のことが最も象徴的である。「Ibn Tūmart は、この世の全ての人々は、al-‘Ashara 及びその子供たちの奴隷であると言った」(al-Baydhaq, p. 81)
- (16) al-Qaṭṭān, p. 74.
- (17) *ibid.*, p. 81.
- (18) al-‘Umari, p. 113.
- (19) al-Baydhaq, p. 82.
- (20) al-Mu‘jib, pp. 194—196. 指名については事実とは断定しがたい。
- (21) al-Baydhaq, p. 75.
- (22) *ibid.*, p. 87.
- (23) K. al-Ansāb, p. 33.
- (24) al-Qaṭṭān, pp. 30—32.
- (25) K. al-Ansāb pp. 33—35.
- (26) R. Montagne, *The Berbers*, Edingburgh, 1973, p. 47.
- (27) J. F. P. Hopkins, *op. cit.*, p. 98.
- (28) H. Terrasse (*op. cit.*, p. 275) は al-Khamsūn が³, 諸部族の代表40人と al-‘Ashara 10 人からなる、としているが³, 両者が別々の組織であることは J. F. P. Hopkins (*op. cit.*, p. 97) によって看破されている。
- (29) al-Qaṭṭān, pp. 32—33.
- (30) Ibn Khaldūn, Vol. VI, p. 470.
- (31) al-Baydhaq, p. 77.
- (32) Documents ineditis, p. 126. 注(2)
- (33) al-Zarkashī, p. 9.
- (34) H. R. Idris, *La Berbérie Orientale sous Les Zirīdes*, t. 1, Paris, 1962, p. 393. 注(449)
- (35) al-Qaṭṭān, p. 75.
- (36) *Ibid.*, p. 81.
- (37) al-Qirtās, p. 114.
- (38) R. Montagne, *op. cit.*, p. 47.
- (39) *Ibid.*, p. 47 の脚注
- (40) al-Athir, Vol. X, p. 576.
- (41) al-Qaṭṭān, p. 27.
- (42) al-Mu‘jib, p. 186.
- (43) al-Baydhaq, p. 132.
- (44) *Ibid.*, p. 80.
- (45) *Ibid.*, p. 79.
- (46) al-Qaṭṭān, p. 28.
- (47) たとえば H. Terrasse (*op. cit.*, t. 1, p. 276) や J. F. P. Hopkins (*op. cit.*, pp. 94—95) を参照

- (48) K. al-Ansāb, p. 29.
- (49) al-Qaṭṭān, p. 33.
- (50) Ibid., p. 130.
- (51) al-Mu‘jib, p. 238.
- (52) K. al-Ansāb は Ahl al-Dār のみ p. 29 で叙述し、他の諸組織を p. 32 以下で叙述している。
- (53) al-Qaṭṭān, p. 28.
- (54) Ibid., pp. 84—89, p. 121. al-Baydhaq, pp. 131—132.
- (55) K. al-Ansāb, p. 43.
- (56) al-Mu‘jib, p. 341.
- (57) al-Qaṭṭān, p. 84.
- (58) K. al-Ansāb, p. 47.
- (59) J. F. P. Hopkins, *op. cit.*, pp. 104—105.
- (60) al-Idris, *Description de l’Afrique et de l’Espagne*, (ed.) R. Dozy, J. de Goeje, Leyden, 1866 (repr. 1968), p. 63. これは, *Kitāb Nuzhat al-Mushtāq fī Ikhtirāq al-Āfāq* の抜萃である。al-Bakri, *Description de l’Afrique Septentrional*, (ed.) de Slane, Paris, 1965, p. 152. これは *Kitāb al-Masālik wa’l Mamālik* の抜萃である。
- (61) al-Qaṭṭān, p. 28.
- (62) Ibid., p. 28 の注(3)。Rachid Bourouiba (*op. cit.*, p. 80, p. 118) は Maḥmūd ‘Ali Makki の説に従っているが、なぜか Ghirrāt を Furāt ととり違えている。
- (63) al-Ḥulal, p. 89. また al-Qaṭṭān の断片的史料, “Six Fragments inédits d’une Chronique Anonyme du début de Almohades,” *Mélanges René Basset*, t. 2, Paris, 1925, p. 340, p. 362 で, Lévi-Roventcal は Ghuzāt と読み、これを私的護衛兵と解釈している。
- (64) al-Qaṭṭān, p. 121.
- (65) al-Ḥulal が Ghuzāt と Rumāt (弓兵) を並記したのは、両者に何らかの関係があったからであろう。事実、1147 年マラケシュがムワッヒド軍に攻囲された時、Ibn Humushk なる男が、「あなた方 (ムラービトたち) には多くの Ghuzāt, 即ち Rumāt がいる」(al-Ḥulal, p. 94) と述べ、両者を同義語として扱っている。Ghuzāt の一般的意味は聖戦の兵士である。
- (66) K. al-Ansāb, p. 48.

(中央大学大学院博士課程)